



いまこのままのわたしが 救われたわたし 「人生に向き合う」

皆さまには新しい年をどのようにお迎えでしょうか。本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

* * *

私は今年70歳、いわゆる「古稀」を迎えます。思えばついこの間まで「人生50年」と言われ、70歳を迎えることは長生きであり「稀」なことでした。しかし今、急激に高齢化は進み、「人生百年」は空想ではなくなり、私たちは衰えを背負いながら長く生きることが覚悟しておかなければならない時代を生きています。

人の一生は、山あり谷あり、喜びも悲しみもあり、じつに変化に富んでいます。そんな人間の一生について、古代インドには「四住期（しじゅうき）」という思想がありました。人生を四つの時期に区切って、それぞれの生き方を示唆する興味深い思想です。

それらは、「学生期（がくしょうき）」「家住期（かじゅうき）」「林住期（りんじゅうき）」「遊行期（ゆうぎょうき）」の四つで、最近では日本でもよく知られるようになりましたが、現代の生き方のサイクルからすると、数字的には20歳近い開きをもって考えていかも知れません。この四つの区切りを分かりやすく、「青年」、

「壮年」、「初老」、「老年」としてみると、前半は現役、後半は老後となるでしょう。しかし今、「現役」でなくなってから人生の「おまけ」のように生きるには、あまりにも長い老後です。長い人生を覚悟しなければならない時代だからこそ、やはりこの人生のひとつひとつの区切りの持つ意味を受け止める思想は必要になっているのではないかと思います。

残念ながらそれまでに人生を終えていかなければならなかった人もおられますが、これからは益々多くの方が「林住期」「遊行期」を生きるのです。生産するという現役ではなくなっても、生きている間は「いのちの現役」であり続ける覚悟と気概を持ち続けたいものですが、それは、「一億総活躍時代」や「終活」で叶うものではありません。それではただの「老害」になってしまう可能性の方が高くなるかもしれません。

* * *

日本にはお年寄りを「翁」という呼び方があります。人が老いるということは、実にさまざまなものを喪失するという現実を生きるということです。肌は張りを失って垂れ下がり、視力も聴力も、あるいは知識や家族、友人も次第に失っていきますが、その喪失の中で老いを真正面から受け止め生きたのが「翁」だったのです。その翁と呼ばれるお年寄りがいた時代は、老いが人生の逃れようのない

自然であることを若く健康な時から学ぶ環境がありました。その寿命が短くとも長くとも、そこには湧き起こる無意識の生命力で生き切る「いのち」というもののもつ本来の姿があり、誰もが必ず行く道を知り、手本とすることができたのです。それを導く翁の願いは、いのち終わるまで消えない煩悩を自覚すればこそ、心の寂滅と命の躍動だったことでしょう。

* * *

親鸞聖人は90歳まで生きられました。医学の進んだ今でも大変な老いる日々の中で、弟子に宛てた手紙の末尾を次のような言葉で結んでおられます。

「目も見えず候、なにごともみな忘れて候うへに、人などにあきらかにまふすべき身にもあらず候…」

他人にとやかく言える身ではないと吐露し、いくら苦しくても、寿命のある限りは生きねばならないという、いのちを生き切って見せて下さいました。

「苦」は「思うようにならないことを思い通りにしようとする」ことです。今の日本には、アンチチェンジングのような、あくまで喪失に抗おうとするような力みばかりが見え、それは時に痛々しく醜くさえあります。喪失の原因が病であれ災害であれ、その中でも差す陽を「綺麗だ」と見れる、それが老人のはたらきなのではないかと思います。そんな「老い」を生きたいものです。 合掌

奏庵法座

日時
1月26日(火)

午前11時～

「真宗宗歌」

正信偈

法話

真宗仏光寺派・大阪別院輪番
大阪高槻・郡家御坊妙円寺住職

葦名 彰 師

ご文章拝読

「恩徳讃」

～*～

おとぎ

新しい年の初法座を迎えることができますこと、今年は特に感慨深く、ありがたく、嬉しく思います。今月は「お見舞いに」という甥に「それなら法話を…」と日をお合わせてもらいました。暖冬のせいで紅梅もすっかり盛りを過ぎてしまいましたが、残り香が階段を上る労を少し癒してくれます。どうぞ香りに一息ついてからお参り下さい。本年も皆様のお参りをお待ちしております。



仏教が生んだ日本語

【利益(りやく)】

人は絶えず自分の利益を求めて生きる。現実の社会全体が、利益社会と呼ばれ利潤追求の機構となっている。いわゆる利分、得分、つまりもうけの関心で成り立っていると見てよい。

宗教においても、祈りに応じて利益をもたらしてくれるのが、よい宗教であると考えられる。雨乞い、雪乞い、疫病払い、息災延命、家内安全、合格祈願、商売繁昌など、願いは欲張りでも多種多様、人は、現実の生活苦からの離脱を求めて祈り、与えられた恩恵をご利益といっている。

しかし、仏教では、自分が得るということだけではなく、他の人を益するということがなければ利益ではない。仏の教えに生きて得られた恩恵を、自利、利他の益として明らかにし、自らが利益を得ることは同時に、他の人々を利益することが実践であり、菩薩の精神であると説く。

仏の教えによって得られる利益は、金銭上や物質上の利益ではなく、自らの「いのち」に目覚めて生きる自覚者の誕生をいう。仏の教えに出会い、教えに導かれて育てられて、我々もまた、自らのいのちの尊さに目覚めて生きる者となるのである。深い意味での利益とは、自己を生きる自分自身の獲得ではないだろうか。そこに自ら人々を利益して、他と共に生きるという、共存の「生」という大きな利益が開かれるのではないだろうか。

大谷大学【編】参考

編集後記

昨年末、インターネット通販のアマゾン・ジャパンが、僧侶手配チケット「お坊さん便」の取り扱いを開始した。知っての通り、葬儀や法事に僧侶を派遣するというサービスだ。当然、仏教界から猛反発が出たが、どこかで「今更…」と感じる自も分いた。■何故なら、これらに関係する業界(あえて業界という)には、もう何十年前前からその下地がはびこっていた。その原因の一因には、その責務を一番負うべき仏教界側にあることは否めず、その僧侶の一人として常々憂い、被害(?)も被っているが、すべてに対しそういう価値観を持つ根底には、何事もお金で判断することに躊躇と恥じらいを持たない日本社会の病巣を思う。■戒名(浄土真宗では法名)、院号を授けるか否か、場所は一箇所か移動するか等々、そのこと細かい「明瞭会計」は身も蓋もなく、それこそ「味噌もクソも一緒」状態で、そこに漂うのはお金の匂いそのもの。寺や葬儀社の金権主義を責めながら、結局は金額が判断の基準なのだ。それが「俗」だと自覚してのことならまだしも、「良いことだ」とするところに過ちを大きくしていく元がある。■このことは日本社会を象徴している。今の政治や教育に危なっかしさを感じるのと同じ、価値観の未成熟を感じるのだ。先頭に立つ人たちが、自分の本分がわかっていないのだ。だから世の中は、政治家臭い、坊主臭い、教師臭い、親みたいなもの、雰囲気(臭さ)だけが溢れている。■道を極めるとは、自ら然り、身につけ、自然にそれが出るようになり、そして「忘れること」で完成するといわれる。茶道に喩えれば、なまじ中途半端だと、いくら作法を間違いなく行っても、素養のない人を接待できないように、衣と袈裟で外観を装いお経を間違いなく唱えても、それだけでは仏縁は結ばず、ただの「読経屋」にすぎない。「お坊さん配達サービス」を無くすには、やはり坊主が坊主であることのはからいを忘れるくらいになって、本物の宗教家の自然な生き方を見せていかなければならないということだろう。 Norimaru